

IX 学会等发表原稿

高齢者向けゲートキーパー養成研修の事業評価と今後の在り方

～関心度の違いによる研修対象選定の一考察～

佐倉市 ○浅沼 愛弥 池澤 優子

I 目的

市では、健康増進計画「健康さくら 21(第2次)」の中間評価に伴い、平成31年3月に「いのち支える佐倉市自殺対策計画」を策定した。計画では、重点施策の一つに「高齢者への支援」を挙げている。

令和3年度から市内公民館と連携を図り高齢者向けのゲートキーパー（以下、GK）養成研修を実施しており、2年間で、115人が受講している。研修は、自殺の現状や基本的知識の講義に加え意見交換などの手法を取り入れ、実施をしている。しかしながら、本研修の対象者は「市民カレッジ」という高齢者大学の受講者であり、GKになることを希望して受講をしていないため、GKへの関心度は低いことが考えられる。GK養成研修において対象者の選定の重要性を鑑み、関心度の高低がある中での研修の効果を評価し、今後の研修対象の選定の在り方について検討する。

II 方法

1. 調査対象：市内公民館主催の高齢者大学である「市民カレッジ」を受講中の2年生のうち、「市民向けGK養成研修」を受講した52名。
2. 調査方法：研修受講前後に調査を実施。質問用紙には、ナンバリングをして匿名化した。同時に3週間後に回答する質問用紙を配布し、次回の受講時に回収した。
3. 調査項目：年代、性別、「こころをサポートする役割についての学習」（以下、「役割学習」）への関心、「こころの健康・ゲートキーパーに関する理解度尺度」（自作）。3週間後の調査では、「研修後の自己の変化」（自作）を追加して質問した。
4. 分析方法：「こころの健康・ゲートキーパーに関する理解度尺度」を点数化し、研修受講前後と3週間後の平均値の変化を比較した。また、「役割学習」への関心の有無について分類をし、前記の平均点の変化を比較した。さらに、3週間後に「研修後の自己の変化」の回答をデータ化して「自殺対策等の知識面」「自身のこころの健康」「人との関わり」の変化について分析をした。分析した結果をもとに、関心度の高低がある中での研修の効果を検討した。
5. 倫理的配慮：研究目的を口頭と書面にて説明し、参加者のデータや調査結果は、統計的に処理し、個人が特定されないように配慮した。

III 結果

1. 調査票回収状況と対象者の属性

表1,2に関する調査については、研修当日の回収数は48（回収率92.3%）であり、性別は男性65%、女性31%、無回答4%、年齢の内訳は60歳～65歳未満が2.1%、65歳～70歳未満が33.3%、70歳～75歳未満が33.3%で最も多く、75歳以上が29.2%、無回答が2.1%であった。また、3週間後の回収数は36（回収率69.2%）だった。

一方、表3についての回収数は26（回収率50%）と更に低かった。性別は男性58%、女性34%、無回答8%。年齢内訳は65歳～70歳未満が34.6%、70歳～75歳未満が34.6%、75歳以上が30.8%である。

2. 「こころの健康・ゲートキーパーに関する理解度尺度」について

尺度について、「わかる」4点「少しわかる」3点「どちらともいえない」2点「わからない」1点と点数化し平均点を出した。研修受講前と受講後と比較すると受講後は全項目で上昇した。また3週間後は、項目1以外の平均点は受講前より上昇した。しかし、受講後と比べると項目6の平均値は横ばいであるものの、その他の項目は低下している。（表1）

	n=48 (3週間後n=36)	受講前	受講後	3週間後	変化グラフ
		平均値			
1 自殺に追い込まれるという危機は、「誰にでも起こり得る危機」であることを知っていますか。		3.4	3.6	3.39	
2 ゲートキーパーの役割を知っていますか。		1.33	3.35	3.22	
3 悩んでいる人のサインを知っていますか。		2.02	2.98	2.56	
4 悩んでいる人への声かけの方法を知っていますか。		1.75	2.73	2.69	
5 悩んでいる人へ案内できる相談先を知っていますか。		1.54	3.12	2.89	
6 ストレスとはどのようなものかわかりますか。		3.06	3.31	3.31	
7 自殺は、その多くが防ぐことができる社会的な問題であることを知っていますか。		2.58	3.31	3.28	
8 自分の心の健康状態を知る方法を知っていますか。（ストレスチェック方法など）		2.17	3.21	2.92	
9 自分のこころの健康を保つための方法をわかりますか		2.54	3.25	3	

3. 「役割学習」への関心の違いでの理解度の変化について。

「役割学習」に関心はありますか、の質問に対し「そう思う」14名(29%)、「ややそう思う」27名(56%)、「あまりそう思わない」6名(13%)、「そう思わない」1名(2%)であり、「高関心群」が41名(85.4%)、「低関心群」が7名(14.6%)と低かった。

受講前の平均点は、「低関心群」の方が、「高関心群」よりも全項目において低かった。受講前後の平均点の比較では、どちらの群もともに、平均点の上昇がみられている。受講後の平均点についても、「低関心群」の方が「高関心群」よりも全項目で低い。しかしながら、前後の平均点の差を比較すると、項目1, 3, 4, 8で、「低関心群」の方が高い値を示していた。（表2）

	高関心群：n=41 低関心群：n=7	受講前	受講後	前後の平均点の差
		平均値		
1 自殺に追い込まれるという危機は、「誰にでも起こり得る危機」であることを知っていますか。	高関心群	3.44	3.61	0.17
	低関心群	3.14	3.57	0.43
2 ゲートキーパーの役割を知っていますか。	高関心群	1.37	3.39	2.02
	低関心群	1.14	3.14	2
3 悩んでいる人のサインを知っていますか。	高関心群	2.15	3	0.85
	低関心群	1.29	2.86	1.57
4 悩んでいる人への声かけの方法を知っていますか。	高関心群	1.85	2.8	0.95
	低関心群	1.14	2.29	1.15
5 悩んでいる人へ案内できる相談先を知っていますか。	高関心群	1.59	3.17	1.58
	低関心群	1.29	2.86	1.57
6 ストレスとはどのようなものかわかりますか。	高関心群	3.07	3.34	0.27
	低関心群	3	3.14	0.14
7 自殺は、その多くが防ぐことができる社会的な問題であることを知っていますか。	高関心群	2.61	3.34	0.73
	低関心群	2.43	3.14	0.71
8 自分の心の健康状態を知る方法を知っていますか。（ストレスチェック方法など）	高関心群	2.29	3.27	0.98
	低関心群	1.43	2.86	1.43
9 自分のこころの健康を保つための方法をわかりますか	高関心群	2.59	3.37	0.78
	低関心群	2.29	2.57	0.28

4. 「研修後の自己の変化」の状況について

3週間後に実施した「研修後の自己の変化」の質問に回答のあった26名について、項目ごとの選択割合を算出した。自己の認識が50%以上変化した項目は、分類「自殺対策等の知識面」では表3質問項目1が50%、「自身のこころの健康」では項目2が73%と最も高く、「人との関わり」では項目4が53.8%、項目5が69.2%、項目6が50%であった。関心や意識の項目について、割合が高くなっており、実際の行動面につい

ては、割合が低くなっていた。

「高関心群」に関しては、割合の傾向は全体数と同様であった。一方「低関心群」4名については、母数が小さいため実数で比較したところ、項目2と項目4が4人中3人(75%)と割合では最も高く、人への関心・意識が高まっていた。(表3)

分類	質問項目	全数(n=26) 割合 (%)	高関心群(n=22) 割合 (%)	低関心群(n=4) 回答数
自殺対策等の知識面について	1.こころの健康や自殺対策について関心を持つようになった。	50	45.5	2
	8.ゲートキーパーや自殺予防に関することを周囲の人に話した。	15.3	18.2	0
	9.こころの健康やゲートキーパーについて自己学習をした。	34.6	36.4	1
自身のこころの健康について	2.自分のこころの健康について意識をした。(するようになった)	73.1	72.7	3
	3.何か不安や困ったことがある時には、人に相談するように心がけた。	19.2	22.7	0
人との関わりについて	4.人との繋がりを普段より意識した。(するようになった)	53.8	50	3
	5.人と関わる時に相手の気持ちを意識した。(するようになった)	69.2	72.7	2
	6.人と話をする際に、話の聴き方に気をつけた。(気をつけるようになった)	50	54.5	1
	7.人から相談を受けた際に専門機関の案内をした。(するようになった)	7.7	9.1	0

IV 考察

1. 高齢者大学の受講者を対象者に選定した養成講座の効果について

Knowles(2001)によると、「人間は成長するにつれて、依存的状態から自己決定性が增大していくので、成人は学習の必要性を実感したときに何かを学習しようとするように変化する」という¹⁾。対象者は、講座の一つとして機会的に受講をしており、ゲートキーパーに関心を持って参加をした者たちではないが、「こころをサポートする役割についての学習」への関心が高い群が多く、学習へのレディネスが高いといえる。(レディネスとは、知能、知識、技能、興味等の学習に必要な準備状態の総称である。)

また、対象者は、自ら学ぶ場に出向いており、学ぶことへの意識が高い者であると示唆され、GK養成講座を行う対象として、啓発効果はあると考えられる。

次に、理解度の変化から、研修内容の全項目において、知識として得られていると評価されるため、このような講座の一環で研修を行うことも、GKの知識の獲得に役立つことがわかる。また、研修後の自己の変化についても、「自殺対策等の知識面」「自身のこころの健康」GKの視点の「人との関わり」について、意識・知識ともに向上がみられており、学習の効果はあると考えられる。

2. 関心の違いによる学習の効果と今後の方向性について

「低関心群」は、「高関心群」と比較して研修前の理解度は全体的に低く、研修後の結果についても、理解度が低いことがわかる。しかしながら、前後の平均点の差から、「低関心群」であっても一定の学習効果はあると考えられる。受講により、自殺が社会的な問題であることや、GKの役割についての理解が深まっている。

また、市では重点施策に「高齢者への支援」を挙げている。市民カレッジの対象者は高齢者であり、「低関心群」にこそ知識を普及しGKについて幅広く周知をすることで、共に支えあう地域づくりをすることが重要である。以上のことから、関心度の高低がある中でも、高齢者大学の受講者を対象にした養成講座の意義は高いと思われる。

V 文献

- 1) Knowles, Malcolm S., The Modern Practice of Adult Education: From Pedagogy to Andragogy, Pearson Education, 2001. (堀薫夫, 三輪建二監訳『成人教育の現代的実践—ペダゴジーからアンドラゴジーへ』鳳書房, 2002)